

令和 6年 2月 29日

福岡市教育委員会教育長 殿

所属校名 福岡市立小田部小学校
職・氏名 教諭 原 瑤子
指導者名 教諭 坂本 香織

研 修 最 終 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

- 1 研修種別 C 福岡教育大学附属福岡小学校研修員
- 2 研修場所及び所在地 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園 12 番 1 号
TEL (092) 741-4731
FAX (092) 741-4744

3 研究主題及び副題

音楽づくりを楽しむ第1学年音楽科学習
～発想を生かし、つなげる題材構成を通して～

4 研究内容の概要

(1) 主題の意味

音楽づくりとは、自分で音楽を生み出すことであり、3つの活動に分けられる。1つは、「音遊び」である。活動を通して身の回りの音に気付き、その音のよさや面白さを味わう活動である。2つは、「即興的に表現する活動」である。その場で自由に子供が作り上げていくものであり、設定された条件を基に、条件に合う音を個人で追求したり、子供がその場で音楽の掛け合いをして楽しさを感じたりしていく活動である。この2つの活動に取り組む中で、「この音では、このようなことができるのではないか」と発想が生まれる。3つは、「音を音楽にしていける活動」である。音楽を形づくっている要素を使って、まとまりのある音楽をつくり上げていく活動である。「音遊び」と「即興的に表現する活動」から生まれた発想を生かして「音を音楽にしていける活動」を行う。

音楽づくりを楽しむとは、身の回りの音や演奏方法の面白さに気付く姿、様々な表現を試しながら音楽をつくり上げていく姿、つくり上げた音楽表現のよさを感じている姿の3つの姿である。このような経験を繰り返していくことで、より音楽への思いが高まり、音楽づくりを楽しむことができる（図1）。

そこで、本研究では以下のような子供の姿を目指す。

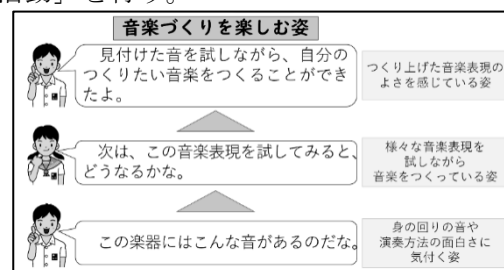


図1 音楽づくりを楽しむ姿

- 身の回りの音に興味をもち、様々な表現を試しながら音や音のつなげ方の特徴に気付き、設定した条件に基づいて表現する子供 (知識及び技能)
- 様々な表現や見つけた音や演奏方法を試しながら、自分の思いに合った表現を生み出すことができる子供 (思考力、判断力、表現力等)
- 身の回りの様々な音や音楽に親しみながら、音楽表現のよさや面白さを感じる子供 (学びに向かう力、人間性等)

(2) 副題の意味

発想とは、「これらの音にはこんな面白さがある」と様々な音の特徴に気付くことである。身の回りにある音を声で表現したり、楽器を使って様々な音を出したりする中で、発想を得ることができる。

発想を生かし、つなげるとは、表現領域や鑑賞領域で得た発想を使って「即興的に表現する活動」「音を音楽にしていく活動」に取り組むことである。

発想を生かし、つなげる題材構成とは、発想を得る「音遊び」等に十分に取り組み、そこから得た発想を生かして「音を音楽にしていく活動」に取り組めるようにすることである。題材構成の考え方として、題材を「であう段階」「つくる段階」「あじわう段階」の3つの段階に分ける。まず、「であう段階」では、音の特徴に気付く、発想を得ることができるようにする。次に「つくる段階」では、「であう段階」で得た発想を生かして音楽づくりをし、さらに新たな発想を得ることができるようにする。最後に「あじわう段階」では、つくり上げた音楽表現を交流することで、自分の発想が生かされた音楽表現のよさを実感できるようにする。

(3) 仮説実証のための着眼

ア 楽曲をつなぐテーマの設定

子供が題材を通して音楽に対しての思いをもち続けることができるように、楽曲や活動は一貫したテーマでつなぐようにする。テーマは、どの子供も音楽に自身の発想を生かせるように、生活経験に近く、子供がイメージと音や音楽を関連付けやすいものにする。テーマを設定する際には、取り扱う音楽を形づくっている要素を明らかにし、その要素を捉えることができるようなテーマや題材を決定し、題材のねらいを設定する。

イ 発想を得ながら音楽づくりを行うための活動配列

子供が発想を得ながら音楽づくりを行っていくために、題材の活動配列を意図的に設定する。まず、取り扱う音楽を形づくっている要素に気付くことができるように、その要素を捉えることができる楽曲や活動を選定する。その中で、「歌唱の活動」「鑑賞の活動」「音遊び」の3つの活動を「であう段階」に設定する。3つの活動の中で、身の回りの音のよさや演奏方法等の面白さを味わいながら、新たな発想を得られるようにする。そして「つくる段階」において、得られた発想を生かして「即興的に表現する活動」や「音を音楽にしていく活動」を行うようにする。これらの活動の中で、見つけた発想を生かしたり、新たな発想を得たりすることができる。「あじわう段階」では、「音を音楽にしていく活動」としてつくり上げた音楽表現の交流を行い、発想が生かされた音楽表現のよさを実感することができるようにする（図2）。

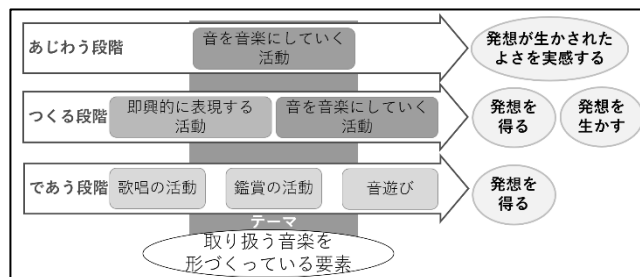


図2 音楽づくりを行う活動配列

ウ 音楽づくりにおける場の設定

「音遊び」「即興的に表現する活動」「音を音楽にしていく活動」では、「楽器や音楽表現を選ぶ場」「楽器や音楽表現を試す場」「音楽表現を発表する場」の3つの場を設定する。「楽器や音楽表現を選ぶ場」は、条件に合わせて楽器やリズムを選ぶ場である。「楽器や音楽表現を試す場」は、音や音楽表現を試しながら音楽をつくる場である。「楽器や音楽表現を選ぶ場」と「楽器や音楽表現を試す場」を往還できるようにすることで、実際に音を鳴らしたり友達と話し合ったりしながら、思いに合わせて楽器や音楽表現を選択することができる。「音楽表現を発表する場」は、音楽表現や込めた思いを発表し、つくり上げた音楽表現のよさを感じる場である（図3）。

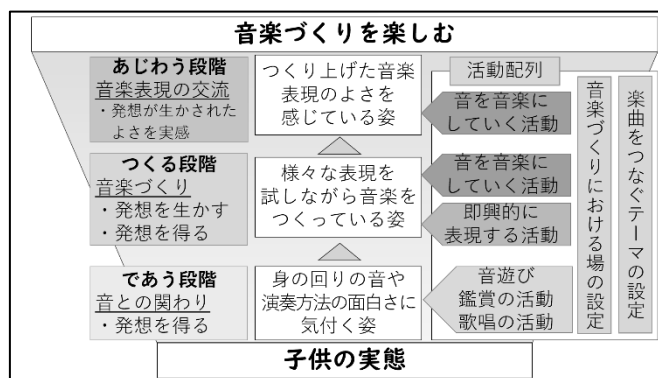


図3 研究構想図

(4) 指導の実際 (10 月実証)

ア 題材名 第1学年 「がっきでよびかけあおう」

イ 題材の目標

- 曲想と旋律や「反復」「呼びかけとこたえ」との関わりに気付き、歌声や発音に気を付けて歌ったり簡単なリズムのやり取りをしたりすることができる。 (知識及び技能)
- 旋律の呼びかけ合いが生み出すよさや面白さを基に、虫の音楽をつくって工夫する中で、思いをもつことができる。 (思考力、判断力、表現力等)
- 友達同士で呼びかけ合いを意識して歌ったりリズムをつくったりする学習に楽しんで取り組もうとしている。 (学びに向かう力、人間性等)

ウ 計画(全7時間)

- (ア) 歌唱の活動や音遊びを通して旋律について知り、「反復」の仕組みを意識して歌う。— 2時間
- (イ) 鑑賞曲「こうしんきょく」を聴き、曲想と「呼びかけとこたえ」の関係を話し合う。— 1時間
- (ウ) ペアで「がっきのまねっこ・おはなし」を行い、「呼びかけとこたえ」「反復」や自他の表現のよさを話し合う。 — 4時間

エ 題材の仮説

第1学年題材「がっきでよびかけあおう」の学習において次の手立てを行えば、音楽づくりを楽しむ子供が育つであろう。

- 音楽の仕組みである「反復」と「呼びかけとこたえ」を捉え、音楽づくりに生かすためのテーマの設定【着眼ア】
- 音遊びの活動を通して、様々な発想を得ながら音楽づくりを行うための活動配列【着眼イ】
- 楽器を自由に選択し、試しながら音楽づくりを行っていく場の設定【着眼ウ】

オ 指導の実際

(ア) であう段階(1～3/7時間)

であう段階では、音遊びや歌唱の活動、鑑賞の活動を通して、「反復」「呼びかけとこたえ」という音楽の仕組みの面白さに気付くことをねらいとした。そのために、音遊びや歌唱活動では、子供の組み合わせを変えたり、活動を繰り返したりしながら、音遊び「まねっこあそび」や歌唱曲「やまびこごっこ」の歌唱を行った。その中で、活動の見通しをもち、自分の言葉や歌声が跳ね返ってくることの楽しさや友達の言葉を繰り返すことの楽しさを感じている姿が見られた。また、鑑賞活動では、2種類の旋律に合わせて2色のカードを上げ下げし、友達の声や楽曲の旋律に耳を澄ましながら、旋律の「反復」「呼びかけとこたえ」の仕組みに気付く姿も見られた。

考察1

であう段階において、音楽を形づくっている要素「反復」「呼びかけとこたえ」を捉えるために音遊び・歌唱曲・鑑賞曲を選定し、繰り返し活動を行ったことが有効であったと言える。それは、音遊び「まねっこあそび」や歌唱曲「やまびこごっこ」を繰り返し行うことで、自分の声が跳ね返ってくることの楽しさを感じ、友達とも自発的に「まねっこごっこ」を行う姿や「山びこなら跳ね返ってきた声は小さくなる」と声の大きさの変化について発言していた姿から分かる。また、楽曲の仕組みが2種類の旋律が交互に表れる鑑賞曲「こうしんきょく」を聴くことを通して、まとまりとして同じ形の旋律が繰り返し用いられていることに気付き、旋律と奏でている楽器の違いについて言及している姿も見られた。これらの姿は、であう段階で身の回りの音や演奏方法の面白さに気付いた姿であると言える。

(イ) つくる段階(4～6/7時間)

つくる段階では、打楽器を使ってペアで音楽表現をつくる「音を音楽にしていく活動」を通して、「反復」「呼びかけとこたえ」といった音楽の仕組みを含む表現を友達とつくり上げる楽しさを感じることをねらいとした。そのために、まず音楽づくりで使用する打楽器の音色の特徴や音への発想を得るために、打楽器に自由に触れる活動を設定した。その次に、打楽器の音色の特徴と虫の音を結び付

C1: (既習内容をまとめた表を指しながら)
速い方が虫の音みたいになりそうだよ。
C2: 速くカバサを動かした方がよいかな。
C1: うん。
(二人で持っている楽器を速く動かしながら音
楽をつくる)

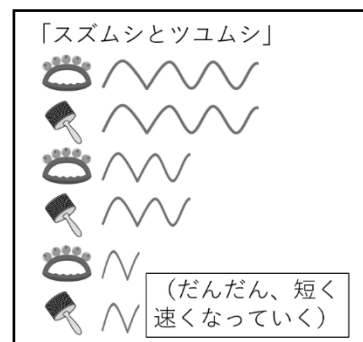
資料 1 虫の音を追求する子供の発言

考察 2

「音を音楽にしていく活動」を行う前に十分に楽器に触れる「音遊び」の活動を位置付けることは、楽器の音色の特徴を掴み、その発想を「音を音楽にしていく活動」や「即興的に表現する活動」に生かす上で有効であったと考える【着眼イ】。その根拠としては、資料1にある子供の発言である。この発言が出た際に子供は、既習内容（「音遊び」や「即興的に表現する活動」で得た発想）をまとめた表を指さしながら発言をしていた。また、「音や音楽表現を試す場」と「楽器や音楽表現を選ぶ場」を往還できるようにしたことは、自分の思いに合った音楽表現をつくる上で有効であったと考える【着眼ウ】。その根拠としては、話し合う中でより自分の思いに合うように楽器を変更する姿が見られたことから分かる。

(ウ) あじわう段階(7 / 7 時間)

あじわう段階では、つくる段階でつくった自他の音楽表現を聴き合う活動を通して、自他の音楽表現の工夫のよさを感じることをねらいとした(資料2)。そのために、全体で音楽表現の交流を行う場を設け、自分たちの音楽表現のよさや友達の音楽表現のよさについて話し合う活動を設定した。その活動の中で、積極的に発表し、自分の演奏を友達に聴いてもらったり、自他の音楽表現の工夫に気づき、その表現のよさについて発言したりする姿が見られた。



資料2 子供がつくった虫の音楽

考察 3

あじわう段階において、自他のつくった音楽表現を聴き合う「音楽表現を発表する場」を位置付けることは、つくり上げた音楽表現の違いから、それぞれの音楽表現のよさを感じる上で有効であった【着眼ウ】。それは、資料2のような音楽表現を聴くときに、2人の楽器の演奏の仕方に着目させることで、「一人が長く叩くともう一人も長く叩いて、一人が短く叩くともう一人も短く叩いていた」と、楽器の演奏の仕方が「反復」になっていることについて述べていた姿から分かる。また、発表の際には、自分たちの行った工夫を発表したり、友達からよかったところを発表してもらったりすることで、「自分たちの演奏ができた」「演奏を聴いてもらえた」と満足そうな姿も見られた。これらの姿は、あじわう段階でつくり上げた音楽表現のよさを感じている姿であると言える。一方で、音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みを工夫していたり、友達の音楽表現の工夫に気付いたりしている姿はあっても、「なぜその表現にしたのか」という根拠を考えるまでには至っていない姿が見られた。

力 全体考察

「虫」というテーマで一貫して題材構成を仕組んだことは、既習内容で得た発想を生かしながら音楽づくりをする姿につながった【**着眼ア**】。また、「楽器や音楽表現を選ぶ場」と「音や音楽表現を試す場」を往還できるようにしたことは、子供が音楽表現を試しながら「この楽器を使いたい」と思ったときに、楽器の変更をすることができ、自分の思いに合った音楽をつくる上で有効であったと考える。また、「音楽表現を発表する場」でも子供が音楽表現のよさを感じている姿が見られ、音楽づくりを楽しむことができたと言える【**着眼ウ**】。しかし、「虫がケンカをしている様子を表しました」と思いをもって音楽をつくってはいるが、なぜその思いを表すのにその楽器や音楽表現を用いたのかについての説明に困難さが見られた。そこで、「音を音楽にしていく活動」に至るまでの活動の中で、よりテーマとの関連を感じられる活動を設定し、発想を共通理解する際に、テーマと楽器の音色の特徴を関連させながら教師が価値付けていくことが必要になると考える【**着眼イ**】。

(5) 指導の実際（12 月実証）

ア 題材名 第 1 学年 「ようすをおもいうかべよう」

イ 題材の目標

- 曲想と楽器の音色や歌詞の表す情景との関わりに気付き、歌声や発音に気を付けて歌ったり、条件の中で音をつなげたり重ねたりして音楽をつくることができる。（知識及び技能）
- 歌詞の表す情景や曲想を基に、歌唱表現の工夫を行ったり、「音色」や「音の重なり」を試したりしながら、季節の音楽への思いをもつことができる。（思考力、判断力、表現力等）
- 「音色」や「音の重なり」を意識して歌ったり季節に合った音楽をつくったりすることに楽しさを感じている。（学びに向かう力、人間性等）

ウ 計画（全 8 時間）

- (ア) 曲想の変化による情景の変化を想像しながら、季節に関する楽曲を聴く。————— 1 時間
- (イ) 歌唱曲「はる なつ あき ふゆ」の音楽や歌詞に合わせて、体を動かしながら情景を想像したり、情景に合うように表現の工夫をしたりしながら歌う。————— 2 時間
- (ウ) 自他の表現のよさを味わいながら、グループで季節の音楽をつくる。————— 5 時間

エ 題材の仮説

第 1 学年題材「ようすをおもいうかべよう」の学習において次の手立てを行えば、音楽づくりを楽しむ子供が育つであろう。

- 音楽を形づくっている要素である「音の重なり」や「音色」を捉え、音楽づくりに生かすためのテーマの設定【着眼ア】
- 音遊び、即興的に表現する活動を通して、様々な発想を得たり生かしたりしながら音楽づくりを行うための活動配列【着眼イ】
- 音楽表現を試したり、思いを確認したりしながら音楽づくりを行っていく場の設定【着眼ウ】

オ 指導の実際

(ア) であう段階（1～3／8 時間）

であう段階では、鑑賞の活動や歌唱の活動を通して、季節がもつ音や音楽についての発想を得ることをねらいとした。そのために、毎時間のはじめに季節のイメージについて共通の認識を得たり、季節に関する楽曲や歌唱曲「はる なつ あき ふゆ」に合わせて体を動かしながら曲想を捉えたりする活動を設定した。その中で、積極的に季節のイメージについて発言したり、楽曲に合わせて体を動かしたりする姿が見られた（資料 3）。

考察 1

であう段階において、季節がもつ音や音楽のイメージについての発想を得るために、季節に関する楽曲に十分に触れ、楽曲に合わせて体を動かしながら曲想を捉える活動を行ったことが有効であった【着眼ア】。それは、資料 3 でまとめた表にあるように、「夏の海は、大きな波が出てくるから、大きな声で歌おう」と、体を動かす中で捉えた曲想と季節がもつイメージをつなげて歌い方を工夫していた姿から分かる。

(イ) つくる段階（4～7／8 時間）

つくる段階では、楽器を使ってグループで選んだ季節に合う音楽表現をつくる「音を音楽にしていくな活動」を通して、発想を生かして「音の重なり」や「音色」を試行錯誤しながら、音楽表現をつくり上げる楽しさを感じることをねらいとした。そのために、まず、卓上木琴やグロッケンなどに自由に触れる活動を通して、楽器の特徴を捉えるようにした。次に、楽器を使って季節の音を追求する活動を通して、であう段階で得た、季節がもつ音のイメージと打楽器の音色の特徴を結び付けて表現したり、新たな発想を得たりすることができるようにした。最後に、「楽器や音楽表現を選ぶ場」や途中で「音楽表現を発表する場」を設定し、得た発想を生かしながらグループで音楽をつくることができ



資料 3 季節がもつ音やイメージをまとめた表（夏）

るようにした。また、この活動では、グループでつくりたい音楽についてワークシートに記入しながら音楽づくりを行うようにした。音楽づくりの中で、自分たちの表したい音楽に沿って音楽表現の工夫を話し合う姿が見られた（資料4）。

考察2

「音を音楽にしていく活動」を行う前の「音遊び」や「即興的に表現する活動」の中で、随時季節がもつ音のイメージにたちかえりながら活動を行ったことは、楽器の音色の特徴と季節がもつ音のイメージを結び付け、その発想を「音を音楽にしていく活動」に生かす上で有効であった【着眼イ】。それは、資料4の子供のワークシートにも、「太陽の輝き（季節のイメージ）」と「グロッケンやトライアングルの音色」が結び付けて記されており、今までの活動で得た発想をグループでの音楽づくりに生かしていることから分かる。

（ウ） あじわう段階（8／8時間）

あじわう段階では、つくる段階でつくった音楽表現を聴き合う活動を通して、自他の音楽表現のよさを感じることをねらいとした。そのために、全体で音楽表現の交流を行う場を設け、音楽表現の共通点や相違点を意識して聴いたり感じたことを話し合ったりする活動を設定した。

考察3

あじわう段階において、自他のつくった音楽表現を聴き合う「音楽表現を発表する場」を位置付けることは、選んだ季節やつくり上げた音楽表現の違いから、それぞれの音楽表現のよさを感じる上で有効であった【着眼ウ】。同じ季節を選んだグループの発表を聴き比べて共通点を見付けたり、違う季節のグループの音楽表現との違いを意識して聴いたりすることで、自分たちがイメージした季節の音楽になっていることを実感することができた。

カ 全体考察

10月実証では、つくり上げた音楽表現に込めた思いと、思いを表すためになぜその音楽表現を用いたのかが結び付いていない子供がいたことを課題として挙げていた。そのため、本題材では「音遊び」「即興的に表現する活動」から季節の音と楽器の音色を結び付けた活動を設定した。全体で季節の音と楽器の音色を結び付ける活動を行ったため、個人での音の追求でも「このように季節のイメージを楽器で表現すればよいのか」と追求の仕方の見通しをもつことができ、「自分で季節の音を表現したい」と意欲を高め、たくさんの音楽表現を試す姿につながった。そして「音を音楽にしていく活動」では、「夏は太陽がキラキラ輝いている。その様子はグロッケンやトライアングルで表現することができそうだ。」と楽器の音色や演奏方法と表現したい季節の音楽を結び付けることができた。

5 研究の成果と課題

（1）成果

- 捉えたい音楽を形づくっている要素を基に、活動配列を仕組み、活動同士を一貫したテーマでつなげることで、子供も活動の見通しをもったり既習内容で得た発想を生かしたりしながら活動をすることができ、音楽づくりを楽しむ子供の姿が見られた。

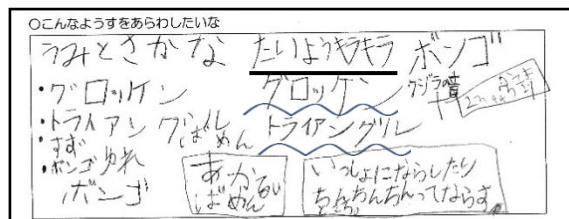
（2）課題

- 「楽器や音楽表現を試す場」において、楽器を扱う時間と思いの表出の仕方（ワークシートの形態）について、子供の実態に応じてバランスをとっていく必要がある。また「音楽表現を発表する場」においては、交流の視点（何を聴けばよいのか）を明確にしておく必要がある。

6 研修を修了しての感想

この1年間で、音楽づくりを中心に音楽科の学習とはどのようなものか、一つ一つ向き合いながら授業を進めたり研究をしたりしていくことができました。今後も学んだことを生かして、発達段階に応じた題材構成を意識し、音楽科の学習がより深まるよう研究を続けていきたいです。

備考 ○ 在籍校と電話番号 福岡市立小田部小学校 TEL (092) 845-8330



資料4 子供の思いが記されたワークシート